

◇===== [ 第 84 号 ] =====◇

唯契の窓 唯物論的社会契約論研究所月報

2025 年 8 月 1 日

◇=====◇

7 月は農事の都合でお休みいただきました。農事は自然相手なので、どうしても時間が取れなくなることもあります。これからもこの手の理由で発行日の変更やお休みをさせていただくことがあるかもしれません。悪しからずご了承ください。

さて今月は先に行われた参議院選挙の結果について検討していきたいと思います。

☆===== [ 時事解説 ] =====☆

7 月 20 日に施行された参議院選挙の結果です。

【選挙後の議席数】()内は選挙前の数字

自民 101(116)、公明 21(27)、立民 38(38)、維新 19(18)、国民 22(9)、共産 7(11) れいわ 6(5)、社民 2(2)、新右翼政党群(参政・保守・N 党) 18(4)、その他 14(12)。

【改選議席のうち比例代表分】()内は改選議席数

自民 12(19)、公明 4(6)、立民 7(8)、維新 4(5)、国民 7(3)、共産 2(4)、れいわ 3(2)、社民 1(1)、新右翼政党群(参政・保守・N 党) 9(1)、その他 1(0)。

三つの政党を新右翼政党群にまとめたことは異議のある所かとは思いますが、政治的立場により分類を行っております。

第 27 回参議院選挙の特徴については、(1) 自民・公明の過半数割れ、(2) 国民民主党の躍進、(3) 新右翼政党群(特に参政党)の勢力伸長(2 から 15 へ)といったところがマスコミでは報じられています。

自民・公明の与党の退潮原因は、国民の不満に他なりません。

具体的には (a)実質賃金の低下による生活苦と (b)「政治とカネ」という言葉に代表される国民に向き合わない与党政治家の姿勢への批判、(c)主食のコメの価格高騰とその原因となった農政の失敗などがあります。

これらにより、従来の保守層が自民・公明の両党から離脱したことに与党退潮の原因があるといえるでしょう。

新右翼政党群の勢力伸長は、自民・公明からの離脱票がもたらした結果なのではないかと思われます。

ここからは 3 年前の参議院選挙(比例代表)との比較となります<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> 2025 年参議委選挙の結果は日経の報道から。

自民党は前回選挙から 5,447,939 票(率にして 12.79%)減らしています。公明党も票数で 970,863 票(率にして 2.85%)減らしました。現政権に対する保守派の不信感は、同じく(もしくはより)保守的な新右翼政党群への支持となって現れたということなのでしょう。新右翼政党群の得票数は 8,676,260 票(率にして 13.95%)でした。

ただ自民・公明が減らした以上の得票を得たのは、今回上がった投票率と関係していると思われます。投票率上昇の原因が、政権選択選挙という今回の参议院選挙が特殊な状況にあったためなのか、あるいは以前の維新の会の「ブーム」のように、彼らの主張が政治不信の有権者の一部分に政治への関心を呼び覚ましたのかは、いまのところ分析できていません。上がった投票率については今後さらに詳細な分析が必要かと思われます。

一方、一時期ブームとなっていた「日本維新の会」への支持は今回失速しました。主に公務員を「既得権益」の享受者として描き出し、国民の分断をあおる形で支持をかき集めてきた手法が、新右翼政党群が同様の手法をとったことで陳腐化したことも、退潮の一因かもしれません。とりわけ参政党が外国人労働者(移民)を不当な利益の受益者として描き出す手法が、自民・公明の支持基盤である保守層に受け入れやすい主張であったことも、日本維新の会の主張を陳腐なもの見せた可能性もあります。

もともと日本維新の会の支持層は、革新的な有権者ではなく、保守中間層であることから、同様の立ち位置にある国民民主党に票を奪われたと考えれば、理解しやすいでしょう。

それは票数や支持率の数字からも見て取れます。日本維新の会は前回から 3,470,069 票(率にして 7.40%)減らしましたが、国民民主党は 4,460,866 票(率にして 6.92%)増加させています。

マスコミはあまり触れていませんが、共産党の退潮も重要な出来事として指摘しなくてはなりません。

共産党は前回から 753,605 票(支持率にして 1.98%)の減少です。投票率が上がっているにもかかわらず得票数が 75 万票も減っている(減少率は-20.8%にもなる)ということは、ある意味危機的であると言えるでしょう。

共産党の退潮の要因は何か。これは自民・公明から新右翼政党群の動向と異なり、保守層の流動という単純な分析では済まされない重要な問題を孕んでいると思われます。ある程度の変化であれば、無党派層の支持が新しい政党に流れたとか、政権党批判の受け皿が他党に移ったなどという分析で済むかもしれませんが。しかしこのような大きな後退は、そのような表面的な分析では済ま

れるものではないでしょう。

共産党の中央委員会は「私たちが、今度の選挙戦をつうじて痛感していることは、自民党政治に代わる新しい政治を国民が模索し探求する「新しい政治プロセス」を前に進めるためには、質の面でも量の面でも、根本的に党の力を強めなければならないということです。」と述べています<sup>2</sup>。詳細な分析は後日されるようですが、相変わらずの「自力論」が繰り返されることになるのではないかと危惧します。

投票率が大幅に上がった今回の選挙で、20%以上も支持率が後退するのはやはり国民・有権者に示した政策に魅力がなかったということを自覚すべき時期に来ているのではないのでしょうか。

共産党の個々の政策は国民の立場に即した立派なものであると思います。しかし、それならばなぜ空虚な政策を掲げた参政党にすら及ばないのか。そこにはそれらの政策を具体的に実現できるのだと有権者を引き付けるビジョンの欠如があると思います。

言い換えれば今、変革(革新)政党に求められているのは「大言壮語」であるということです。

いま有権者の大多数は政治に失望もしくは絶望している状況です。それは今回の選挙ですら投票率は58.51%<sup>3</sup>だったという事実に見えています。1980年には74.54%であったことを思うと、この間いかに多くの有権者が政治に失望・絶望していったかがわかるでしょう。投票した有権者の中にも明らかに現在の政治状況(保守・革新ともに)にノーを突き付けている人々も存在しています。それを示すのが無効票(白票を含む)の動向です。

平成19年から令和4年までの参議院選挙の結果でも、2.85%から3.57%まで一定数の無効票が報告されています<sup>4</sup>。全国一比例代表選挙で白票数の多い沖縄の琉球新報は次のような指摘をしました<sup>5</sup>。

「沖縄県選挙管理委員会によると、無効票の内訳で目立つのが、何も書かずに投票する白票だ。前回22年は無効票が4万2337票あったうち、53・7%に当たる2万2732票が白票だった。投票率の低下もあり16年以降は無効票の実数自体は減少しているが、白票の割合は増しており、19年、22年は5割を超えている。」

「比例の無効票や白票が多いことに関して、県選管では分析はしていない。

---

<sup>2</sup> 参議院選挙の結果について 2025年7月21日 日本共産党中央委員会常任幹部会  
[https://www.icp.or.jp/web\\_policy/13599.html](https://www.icp.or.jp/web_policy/13599.html)

<sup>3</sup> jiji.com 2025年7月21日 <https://www.jiji.com/jc/article?k=2025072100290&g=pol>

<sup>4</sup> 総務省 [https://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo\\_s/data/sangiin/ichiran.html](https://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/data/sangiin/ichiran.html)

<sup>5</sup> 琉球新報 2025年7月11日付  
<https://ryukyushimpo.jp/news/politics/entry-4433888.html>

全国的に共通する事情だが、無党派層の拡大、政党政治への関心の薄れなどが影響し、より身近な地元の代表を決める選挙区と、全国から代表を選ぶ比例との間で落差が生じているとみられる。」

選挙において白票を投ずる行為については、それを政治批判の表現として積極的に評価する論調と、投票する以上無効票の発生は極力抑制すべきという二つの意見があります。

Yahoo ニュースは 2024 年 10 月 24 日付の記事<sup>6</sup>で、品田裕氏の見解として、「誰も選びたくない、適切とは思わないという意見を表面するという点に意味を見出すのであれば、白票でも投じる意味はあると思います。むしろ、棄権では行動の意味が一切、明らかになりません。棄権も白票も投票には影響を与えないが、まだ、意味を見いたしやすいのは白票といえます。」と記しています。

この見解を裏付けるように、日本経済新聞電子版は 2024 年 11 月 2 日付の記事<sup>7</sup>で次のように報じています。

落選した自民元職のひとりには敗因のひとつにあげる。「相手が得票を伸ばしているわけではなく、自分の票が減った。無効票の多くは前回自分に投票した有権者ではないか」と分析する。

少なくとも白票や無効票の背後には、現在の政治そのものに対する深い批判の意思が存在しているということを忘れてはならないでしょう。

こうしたことを踏まえて、先の「大言壮語」の重要性を改めて強調しておきたいと思います。

ここでいう「大言壮語」とは、社会変革を目指す政党が、何を、どう実現するのかを単純化して示すということです。

賃金の大幅な上昇や、医療・教育・福祉面での勤労国民の負担軽減、気候変動を含む人類的危機への対応は、社会の仕組みを変えてこそ実現できること、そしてその方法として間接税の廃止と累進課税の強化、法人税を 100%にする、配当を含む利子行為の禁止、地代行為を禁止することを方法として提案します。そしてそれを実現するには有権者の「投票」という行動があれば、即座に社会の仕組みが変えられるのだという「大言壮語」を掲げることを真剣に提案したいと思います。

---

<sup>6</sup> <https://news.yahoo.co.jp/special/lets-vo/>

<sup>7</sup>

[https://www.nikkei.com/news/print-article/?R\\_FLG=0&bf=0&ng=DGXZQOUA31AMS0R31C24A0000000](https://www.nikkei.com/news/print-article/?R_FLG=0&bf=0&ng=DGXZQOUA31AMS0R31C24A0000000)

尤も、基本的人権という資本主義の支配的精神に囚われ、体制内政党と化した今の共産党にそれが言えるかどうか甚だ疑問ではあります。ただそれは共産党内部の問題ですから外部からとやかく言うべきことではないかもしれません。

ではそれを言うことのできる政党はあるのかというと、まさに私たちが立ち上げようとしている科学的左翼急進党(S. R. L.)がそれです。

次回の総選挙までに、結党できるように、唯物論的社会契約論研究所もさらに努力を続けていきたいと思います。

なお、今回躍進した参政党については、別に検討の機会を設けるべきか少し迷いました。しかし、その政策目標は到底現代の日本人が受け容れられる内容ではありませんし、政策内容も思い付き程度の中身しかないようですので、一、二度国会で論戦すれば彼らの馬脚は白日の下に晒されることになると思います。

ただ気を付けなくてはならないのは、第二次大戦前のヴァイマルの例もあって、国民・有権者が彼らの扇動に乗せられる可能性が無きにしも非ずということです。参政党については少し様子を見てみようかと思います。

以上、7月に行われた参議院選挙の分析でした。

☆＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝☆

●＝＝＝＝[ 再論 唯物論的社会契約論 下書き ]＝＝＝＝●  
今回は、字数の関係で休載します。

●＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝●

◆＝＝＝＝[コラム]＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝◆

自民党内の理不尽な石破氏おろしについて

石破氏の首相・総裁辞任を求める声が野党のみならず、自民党内部からも上がっているようです。

石破氏おろしの急先鋒は旧安倍派のリーダーたちだそうですが、これは傍目に見ても理不尽極まりないと思えます。

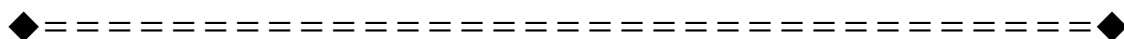
野党が通級するのは当たり前なので何の問題ありませんが、自民党内のしかも安倍派がそれをするのは、まさに「天に向かって唾する」行為に他なりません。

だいたいなぜ自民党がこの間の選挙で苦境に立たされてきたのか。それは旧安倍派が引き起こした裏金問題が尾を引いていることも一つの要因だったはずですが。石破氏にしてみれば「あんたたちの所為でしょうが!」と言いたいに違いありません。実に理不尽ですねえ。

その自分たちの行為を棚に上げて石破氏を降ろそうというのは、総理総裁のポストを自分たちが手に入れたいというパワーゲームでしかありません。自民党瓦解の危機に際してもまだそんなことをやっているのかと、あきれられていることに彼らは気づいているのでしょうか？

しかし敗戦の理由を倫理観というか政治姿勢の問題だけに局限して、みそぎをすれば何とかなると思い込んでいる姿に自民党の寿命を感じます。

もはや時代は政権選択の時代ではないのです。体制（社会制度）選択の時代に変わりつつあるのに気づいていない辺り、自民党の老衰死も間近ということでしょうか。いやもうご臨終でしょう。



【活動報告】

三田市民病院統廃合反対のビラを配布しました。

【次回発行】

次回は9月1日の発行を予定しております。